

9. 建築物

9-1. コタンの概況

父は、幕別生まれで、父の両親も幕別生まれであった。母は、伏古生まれで、家族は姉（故人）弟（故人）妹がいた。

幕別のコタンは、幕別川とサルベツ川（相川？）との間にあるイカンベツ（千住？）に約20軒の家があり、それ全体を幕別コタンと呼んだ。

伏古は、50年くらい前、12歳くらいまでアイヌチセばかりであった。12・3歳のころ、ベランダ付きの和人の家が二軒でき、珍しくて見に行った。

どの家も戸口の向きは、コタン内では同じで、川の向きによってコタン毎に異なる。帯広、芽室、幕別は、戸口を東に向けるが、音更川沿いのコタン（池田、音更）では、向きが違っていた。何故戸口の向きを違えるのかは聞いていないが寒さが入らないように風のむきで戸口を変えるのだと思う。西風の所では、東に戸口を向ける。戸口は、川下に向き、ロルンプヤラ *rorun puyar* は、西側に向く。上士幌、音更、芽室は、川の北側にコタンがあり、伏古、幕別は、南側にコタンがあった。

〔伏古・山川 弘氏〕

9-2. 家の建て方

図26のように家の東側の戸口の柱から建てる。柱にする木材はドスナラが良い。東側の戸口側にある柱二本をウサルン イクシベ *usarun ikuspe* という。四隅の柱が立つと柱と柱の間に一間おきに間柱を建てる。この間柱は四隅の柱より細い。柱を立てる時には穴を掘らず、皮を剥いて尖らした木の根の部分の部分を地中に突き刺す。柱が立つとその上に桁と梁を載せる。柱と桁はシナの木皮（クケルケブ *kukerkep*）で結び付ける。桁の上で屋根を組み、その上にヨシで屋根を葺く。地上で屋根を組み立ててそれを載せるという事はしなかった。戸口側のモセム *mosem*（下屋）は、図27のように母屋と同じ形をした小型のものが並ぶようになる。壁も屋根も同様にヨシ（サルキ *sarki*）とかオニガヤをつかった。ヨシは人の背だけよりも高いものだった。屋根を葺く時に人が屋根に登って葺く。ヨシを押さえる横木をサクマ *sakma* という。

壁は、ヨシの根元を下に向けてふく。モセムの壁もモセムの上部壁も（即ち主屋の戸口側の壁）同様であるが最上部に煙り出し窓（リクンプヤラ *rikunpuyar*、あるいはエトゥポク *etupok*）を設けるので、最後のヨシは根元を上に向けてふく。こうすると先が真っ直ぐに揃う。これは、煙りと一緒に火の粉が舞い上がったときに、ヨシに火がつくのを防ぐためである。神窓の方には煙り出し窓はないので他の壁と同じようにふく。この煙り出し窓が東にあるのは、この辺は、

西風(オキムンレラ okimunrera、東風 オパシレラ opasrera) が強い為ではないかとおもっている。

図26. 伏古(帯広)の家屋の柱の配置

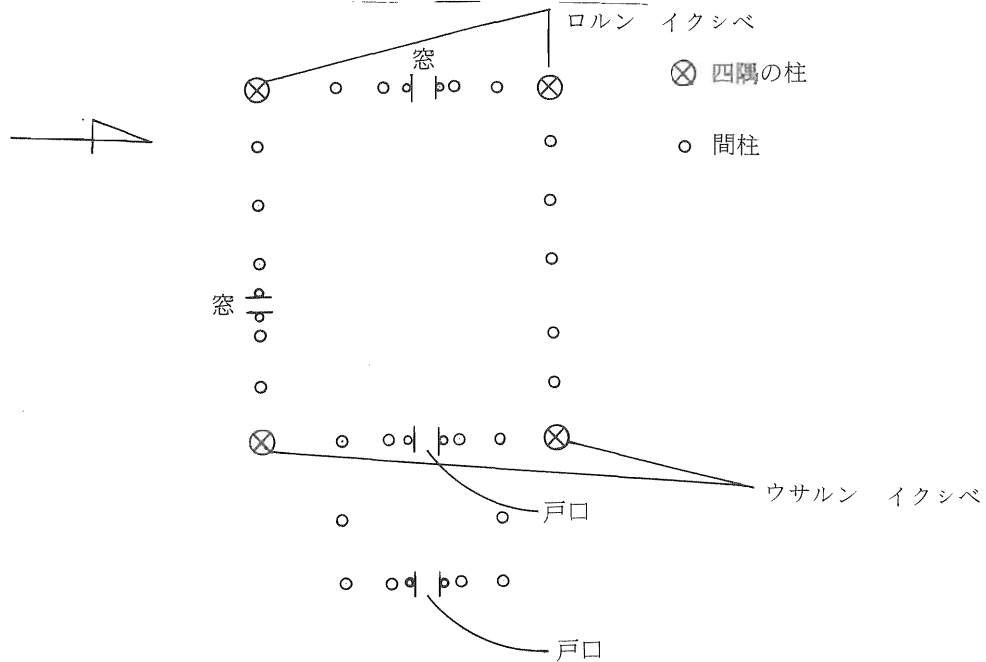
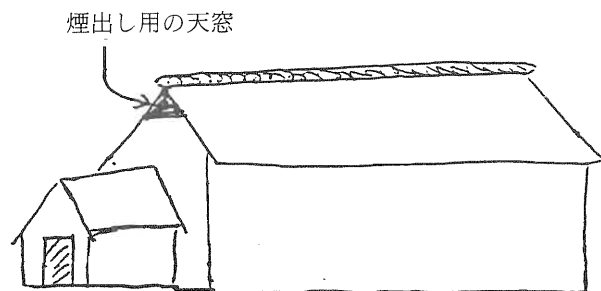


図27. 伏古(帯広)の家屋



屋根をふく時も壁の時と同様に、ヨシの束を屋根に上げ、バラしてから広げ、ヨシの根元を下に向けてふく。ヨシの長さ三分の一くらいのところを横木で押さえてシナの木皮で縛る。屋根の頂上に至るとヨシの先を反対側の屋根に折り曲げる。反対側の屋根からも余ったヨシの先がくるのでそれを重ね合わせる。更に、その上にてヨシの束を載せる。戸口の方にヨシの根元を向け、先が神窓の方に向くようにする。

〔伏古・山川 弘氏〕

9-3. 屋内の構造

横座(上座)の窓 ㊸(図28)をロルンプヤラ rorunpuyar と呼び、これは西に向く。南にある窓 ㊹をオシソウン プヤラ osiso un puyar と言う。窓には、ガラスなどなく、スダレが掛けてあった。スダレをプヤロロッペ puyarorotpe という。㊸戸口のスダレは、アパロツペ aparotpe という。これは、風のある時以外は、巻き上げておくが家の中は平均して暗かった。

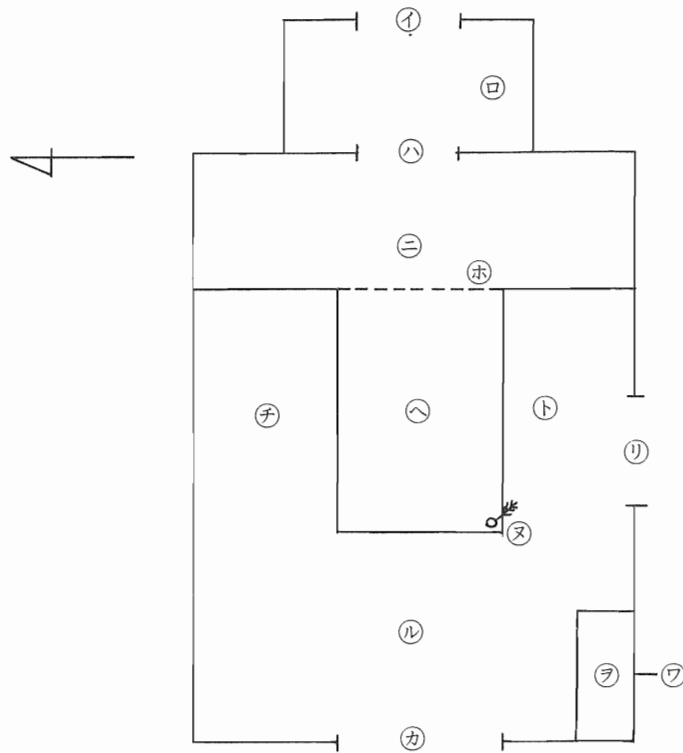
窓が三つある家もあったが大抵は、二つである。

①戸口からすぐに ②モセム *mosem* (下屋)に続き、③また戸口がある。④土間(或いは「にわ」)は、ウサル *usar* という。土間は、昔はかなり広がった。床は、そのうえにアプッキ *aputki* を敷き更にキナ *kina* を敷いてあった。12・3歳の頃、土間を残して板敷きになったが、後に板敷きになった分だけ床面が炉より高くなった。それまでは炉と床の高さは同じであった。ここから炉内へ ケル *ker* をはいたまま入り炉縁に腰掛ける。ケルを炉縁で解くようになっている踏み込み炉であった。⑤に炉縁木 イヌムベ *iunmpe* がある家とない家があった。炉⑥をアペソコツ *apesokot* という。炉縁木はイヌンベ *inunpe* という。⑦はオシソン *osison* で主人が坐る所である。⑧は、オハリキソ *oharkiso* で客が坐る所。炉には、⑨アペフチイナウ *apehuci inaw* と呼ぶシトウイナウが一本立ててある。カムイノミすると一本増えるのであまり数が多く古くなると燃やして火の神に捧げる。⑩ロールオル *ror or* (横座)。その隅に ⑪イノマ *inoma* (宝壇)があった。幕別の祖父の家は火事になってシントコ *sintoko* など全てを失った。その上の壁に横木を渡しそれに立て掛けるようにして(ヌサ *nusa* として)イナウを刺す。これを⑫チセイナウ *cise inaw* と呼ぶ。このイナウの種類は、シトウイナウ *situ inaw* よりも長いイナウネトパ *inaw netopa* (或いは、リーイナウ *ri inaw*) である。一年に二回カムイノミ *kamuynomi* する度にそれぞれ一本ずつイナウを増やしていき、古くなると始末する。火の神(アペフチ *apehuci*) は女の神でチセ イナウを捧げるチセ エカシ (*cise ekas*) あるいはチセシクカマエカシ (*cise sikkama ekas*) とかチセオシケシクカマエカシ (*cise oske sikkama ekas*) と呼ばれる神は、男神である。あるいは二人の神は夫婦であるのかも知れない。家のヌサ(オハリキソのロールンプヤラ寄りの壁の上部にある)に一年に一回カムイノミをしてイナウを捧げる。時期は、冬正月過ぎて都合の良い日を決めて行う。主人の坐る前の炉内にアペフチのイナウを立て、神窓の両側に小さなシトウイナウ(ロールンプヤラシクカマカムイ *rorun puyar sikkama kamuy* と呼ぶ)を二本立て、さらに入り口の両側にもイナウ(ウサラシクカマカムイ *usar sikkama kamuy* と呼ぶ)を二本立て、それぞれにお祈りする。

イナウの種類でシトウイナウは、短いイナウで、木の先の方から削りイナウキケを三段に付ける。アペフチイナウは、皮を剥いでからイナウケ *inawke* するが、外に(エソバウン *esopaun*、ソーパタ *sopata*)置くイナウは、皮を剥がないで削る。イナウ ネットパは、木の先から削り、下方にキケを垂らす。チセ イナウは、下部を細く尖らす家の外に(エソバウン *esopaun*)立てるイナウは、下部を斜めに切り、ヌサの高さに合わせて、脚を付ける。イナウキケを三ヶ所縛る。

[伏古・山川 弘氏]

図28. 伏古（帯広）の家屋の平面図と配置



火と炉について ニトコム *nitokom* という木に刺さっている固いものから、もっとも火が付き易いところを取って、これと火打石(ピウチスマ *piwcisuma*)を持って山に行く。火打石をぶつけると、その綿のようなものに火が付く。火が付くと、「プー、プー」と言って吹く。(火を吹く息は、唇を破裂させて出すもので、日本式の「フー、フー」ではない。) 燃え上がると樺皮(タツ *tat*)に火を移す。焚火を作るため(アペ アレ *ape are*)、前もって小枝をたくさん折っておき、その上に木を載せてあるから、その下に火の付いた樺皮を入れる。このようにして、火ができ(アペ ア *ape a*)、灰ができる(ウナ ア *una a*)。オッアラ エンコタ ウフィ コトム アニヒ ウク ワ ピウチイシ トウラノ エキムン オマン コロ アリノ ピウチイシ ウトモシマ ア ヒンネ コロ ワタ エネプコン アン ベ ウフィ。ウフィ コロ オロワノ プー プー って アウキ ア ヒンネ イキアウ ウフィ コロ タツ ウフィカ。アペアレ クニ ネ チャテク カイパ ワ カシケン ニ オ ワ ネアン チョルポケン チノイエタツ エオマレ ワ アペ アレ。テク アペ ア ワ ウナ ア チカナクネ *o"ar enkota uhuy kotom an ihi uk wa piwciisi turano ekimun oman kor arino piwciisi utomosma a hinne kor wata enepkon an pe uhuy. uhuy kor orowano phu:phu:tte awki a hinne ikiap uhuy kor tat uhuyka. apeare kuni ne catek kaypa wa kasiken ni o wa nean corpoken cinoyetat eomare wa ape are. tek ape a wa una a cik anakne* (以下次の段落に続く。)

火を消すときは、燃えている薪(アペケシ *apekes*)を灰の中に刺し(エシツチュウカ *esitciwka*)、その上に灰をたくさんかける(エシクテ *esikte*)と、翌日まで燠がのこっている(ウサッ ア

ン usat an)。こんど アペケシ ウナ オレン エシッチウカ ワ カシケ ウナ ポロンノ エシクテ コロ ニサッタ パクノ ウサッ アン ワ アススイ だけ アペアレ する の。
kondo apekes úna or en esitciwka wa kasike una poronno esikte kor nisatta pakno usat an wa assuy dake ape are suru no.

その木は翌日になると燠になっているから、それで火をおこす。ネアン ニ ニサッタ アン コロ ウサッ アナンベ。ネアンベ アリ アペアレ アン。nean ni nisatta an kor usat an anpe. neanpe ari apeare an. 冷たい灰 (ヤム ウナ yam úna) をかけると消えてしまう (ウシ us)。熱い灰 (セセク ウナ sések úna) を燃えている薪の上にかける (オ o) と翌朝になっても燠がある。ヤム ウナ ネ チク ナニ ウシ ナンコロ クス セセク ウナ アペケシ アリーノ ア カラ ワ カシケ ア オ チク ニサッタ クンナノ アン コロ ウサッ アン。yam úna ne cik nani us nankor kusu sések una apekes ari: no a kar wa kasike a o cik nisatta kunnano an kor usat an.

どこを歩いていても、仮小屋 (カシコツ kaskot) で生活するときでさえ、灰はたくさんあるから、一度火をつけると、ちゃんと上に灰をかぶせておけば (カムレ kamure)、翌日になっても燠があり、火をおこすことができる。ネイ タ パイエ アナ、カシコツ オツ タ エネ イキ ヤクカイ ウナ ポロンノ アン クス アススイ アペアレ アン チカナク オロワノ ピリカノ カシケン ウナ ア カムレ コロ ニサッタ アン チク ウサッタ アン ワ アリ アペアレ アン。ney ta paye an a, kaskot ot ta ene iki yakkay úna poronno an kusu assuy apeare an cik anak orowano pirkano kasiken una a kámure kor nisatta an cik usatta an wa ari apeare an.

家にいるときも、母から「お前達、寝る前に、灰をかけておきなさい (オマレ omare)」と言われた。

ピウチ石で、オブサ opsa という非常に軽い木の木片か、サルノコシカケ (ニトコム nítokom) を粉にしたものに火をつける。オブサやニトコムは火がつきやすい (アペ ウク ape uk)。

私の夫は釧路中学に入学したが、その年の6月に父親が亡くなり、学問をあきらめ本別に戻ってきた。そのおり白糠に寄り、カムィノミ kamuynomi (カムィノミは年に二度春と秋に行なわれる) に招かれた。白糠は早くから南部衆が入っていたので、カムィノミも日本語で「アカンノヤマ マシマシ ケンブリデルヨウニ」と述べられた。結婚してからも夫はよくその話をして皆を笑わせていたが、私は、その祈りの意味は「大きな村があつて、煙がたくさん上がっているならば、その村は栄えるが、煙がとだえたら滅びてしまうぞ。だから決して火を消すなよ。火がたくさんあるならば、村は栄えているのだから。シ ポロ コタン アン ワ スブヤ ポロンノ アン チカナク ネアン コタン アスル アシ ル ネ コロカイ スブヤ イサム チカナクネ ネ ワ アン コタン シオケレ ル タバン ナ。クス イテクケ アペ ウシカ ヤン。スブヤ ポロンノ アン チカナク コタン ピリカ ル ネ ナ。si poro kotan an wa supuya poronno an cik anak nean kotan asur as ru ne korkay supuya isam cik

anakne ne wa an kotan siokere ru tap an na. kusu itekke ape uska yan. supuya poronno an cikanak kotan pirka ru ne na.)」ということだとウチャシコマしてあげたら、夫は非常に驚いていた。

〔本別・沢井トメノ氏〕

9-4. 屋内の構造

ムルクタウシ murkutausi～ムルクタシ murkutasi はゴミを捨てる所で戸口からかなり離れた所で川の方に近い所にあった。ウナクタウシ unakutausi～ウナクタシ unakutasi は灰を捨てる所で何時も灰が小山のようになっていた。これは、祭壇の近くにある。

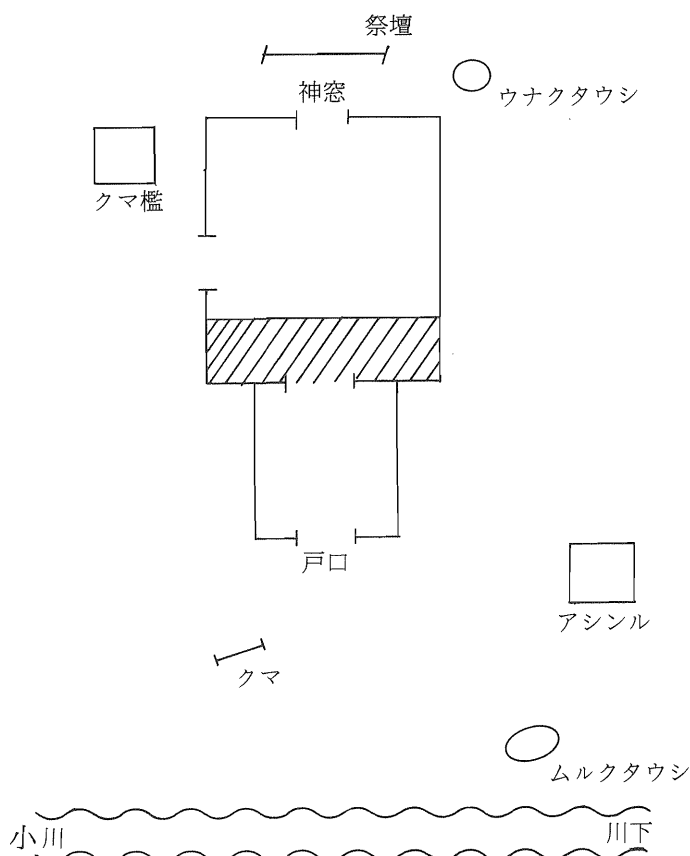
祭壇(ヌサ nusa)はエソバウン esopaun(家の裏、ロールプヤラの外側)に家から一間半くらい離れた位置にある。祭壇は、一軒一軒の家にある。現在は、幕別で年に二回カムイエロキ kamuy eroki という祭りをおこなうのでヌサ nusa(ヌサ サンは丁寧な言い方)は、一個しかない。ヌサに立てるイナウは、最低5本で、自分の家では、1. ポロシリ poro sir、どこの山かは、不明。日高の山だと思う。山の神というだけで熊の神ではない。2. ニワシ コロカムイ niwas kor kamuy 意味が分からない。(ニワシ niwas が河口の流れなので「河口の神」か?)。3. コタン コロカムイ kotan kor kamuy(オオフクロウ)。4. チブタチカプ ciptacikap(奥山にいるアカゲラで、舟を掘るかのように木に穴を掘るので尊ばれている。人間は、この鳥の作る穴を見て舟作りをするようになったと言われている。)5. シペツ si pet。茅室、幕別、伏古では十勝川、利別では、利別川がシペツである。音更では、音更川がシペツである。ワクカウシカムイとは異なる。

家を立てる場所は、シペツからポンペツ pon pet が入るそのポンペツの近くである。ポンペツの上流にはヤムワッカ yamwakka(湧き水)があるのが望ましい。水くみに行く道をルエサン ruesan という。水汲み場をワクカタウシ wakkatausi といい、ここにもイナウを立てる。川水よりも湧き水のほうがおいしい。水は、樽(オンダロ ontaro)に入れモセム mosem に置く。井戸水を使っている人もいた。井戸をシムプイ simpuy といい、皮を剥がさないシトゥイナウを立ててノミする。この神をシムプイカムイ simpuy kamuy という。

家の戸口の前に肉や魚を乾すクマ kuma があつたが魚はほとんど家の中で乾した。熊の肉はサカンケ(sakanke 乾かすためにゆでる)してモセムの近くの見易いクマに乾した。戸口の南よりに便所(アシンル asinru)があつた。食料倉庫(プー pu)は、昔あつたと祖母などが言っているのを聞いた事があるが実際には見た事がない。昔、プーは猟の達者な者は二つも三つも持っていたそうだ。

〔伏古・山川 弘氏〕

図29. 伏古（帯広）の屋内の配置



ヌサの禁忌

私が嫁いだ沢井家は、イソウンクル isounkur の家だから、大きなヌサがあった。ところが「でめん」の人たちが野良仕事の合間ヌサ (nusa 祭壇) の陰で小便するようになったので、カムイノミして「おさめた」。ヌサ nusa は絶対に動かすものではないし (ヌサ アナクネ オヤケン ア ツクテフ ソモ キブ ネ nusa anakne oyaken a cukte p somo ki p ne)、また燃やしては (ウフィカ uhuyka) いけないので、その場に「おさめた」(オプニカ opunika)」。ヌサはその場でイワクテ iwakte するものだ。

近藤エカシという釧路から来たエカシがヌサをおさめる儀式を行なってくれた。新たにイナウを作り、酒を差し上げカムイノミしたあと、その場に新しいイナウも古いイナウ (モシマ オカイ フシコ イナウ mosma okay husko inaw) もそろえて倒し、そのままにしておくのがやり方だ。ヌサの所に生えていたアカダモの木は切り倒して短く切り分け、沢に持って行って土を掘っていけた (埋めた)。

釧路で兄弟げんかした人がヌサを二つに分けて別々に持って行ったら、その二つの家は全滅した。

「ハチローおじさん」は私の義父の弟で、ヌサをおさめる時そのヌサを分けてもらいたがっていたが、釧路から来た近藤エカシが止めた。あくまでヌサは移動させないものだからだ。

[本別・沢井トメノ氏]